No.192　2012．3

聖 鐘

日本聖公会東京教区　**東京聖三一教会**
牧師　司祭 高橋顕
〒155－0032　東京都世田谷区代沢2－10－11
TEL 03－3421－3646　FAX 03－3414－9023
URL trinity.web.infoseek.co.jp

大斎節の歩み

司祭　高橋顕

イエスとその弟子たちが都のエルサレムに向かう途上、イエスをよしとしないファリサイ派の人々が近寄ってきて、イエスに忠告します。聖書の原文のギリシア語の直訳では、そのファリサイ派の人々の言葉（ルカ13・31）は、次のようになっています。「去れ、そして、行け、ここから。なぜなら、ヘロデは、したいと思う、あなたを、殺す。」ファリサイ派の人々は、イエスに思いやりを持って危険回避の忠告をしているのではありません。むしろヘロデ王というユダヤの支配者と同じ側に立って、イエスを追放しようと脅迫しています。これ以上、我々の国で、社会で、言葉を話すな。行動するな。都に近づくな。神聖な神殿に近寄るな。さもないと、王があなたを殺す。このような語調で、王の権力を引き合いに出してファリサイ派の人々はイエスを脅します。ヘロデ王もまた、処刑された預言者である洗礼者ヨハネの再来がイエスであると理解し、イエスの存在を消し去ろうとしていました。

しかしイエスは、神より与えられた役目がすべて終わるその時まで、「わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。」とはっきり明言します。そしてこのイエスの言葉は、神のみ心をひたすら告げ顕わしたがゆえに迫害されてきた、預言者たちの歴史に連なり、重なります。イエスは自らの言葉をもって、神のみ心とイエス自身の願い、そして預言者たちの悲願を、訴えます。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。」

親鳥が翼を精いっぱい大きく広げてその雛たちをおおって保護する光景を目撃したことがあります。親鳥は迫ってくる危険を避けてすぐに飛び立って逃げられるにもかかわらず、まだ飛べない小さな小さな雛たちをその翼の羽で囲い、おおって守ろうとします。しかし雛たちは状況がわからず、おおわれた親鳥の翼から出ようと無邪気に動き回ります。しかしそれでも親鳥は自らの危険をかえりみず、右往左往しながら必死に雛たちを自らの翼でおおい守ろうとするのです。その光景は、見ている者の心が痛むほどに、「愛」を思い起こさせます。

イエスは自らの目的を遂げようとされ、都エルサレムに向かって進みます。神の愛ですべての人をおおい、囲み、永遠の命を与えようと、ただその目的を実現するために、エルサレムへと進みます。それは十字架の苦難と復活の勝利への歩みです。私たちの大斎節の歩みは、このイエスの歩みと重なり、神のみ心の実現に深く参与しているのです。

教会委員会報告より（11月･12月･1月･2月）

[11月]
① バザーの総収入は1,739,741円。多くの方々のご協力、献品に感謝。
② 臨時受聖餐者総会が行われ、特定目的積立金を一般会計に用いる件と、教会塔屋外壁補修工事を行う件が承認された。
③ 塔屋外壁の補修工事を開始。
④ 2012年度の教会委員および教区会信徒代議員選挙の準備を始める。

[12月]
① 12月3日付で、マリヤ山本正子さんが長坂聖マリヤ教会に転籍。
② 12月25日に、ダビデ服部貢士さん、セバスチャン大部胡知さんが受洗。
③ 教会塔屋外壁の補修工事を進めているが、十字架設置、避雷針設置等の追加工事が必要となり、これを承認。
④ バザー収益奉献先の献金額については次の通りとする。バザー収益1,331,936円の内、アジア学院に13万円、アルディナウペポに13万円、桃･柿育英会（東日本大震災遺児育英基金）に33万円、震災被災地障害児支援に33万円、教会の働きのために411,936円。

[1月]
① 2012年度の教会委員及び教区会信徒代議員が選出され、任命された。
② 昨年度（2011年度）の教務･教勢の統計がまとまった。主日礼拝出席者、ぶどうの木の礼拝出席者が増加している。
③ 2012年度は、東京聖三一教会が山手教会グループ協議会の幹事教会となる。
④ 昨年来行われている教会塔屋外壁補修工事の本体工事が終了し、1月15日に足場が外される。工事費用は、十字架修復の追加費用、避雷針設置費用等が加算され、合計661万円となった。

[2月]
① 2月より毎週水曜日午後7時に夕の礼拝を行っている。
② 2月12日に本年度の受聖餐者総会が行われ、昨年度の決算、本年度の予算、本年度の会計監査担当者が承認された。
③ 今年の大斎節の日程･礼拝の確認。
④ AED（心臓救命装置）の設置を検討していく。
⑤ 教区の東日本大震災支援募金に対しての当教会の取組みについて検討し、震災支援については様々な方法で行い、震災募金のための献金の呼びかけ方法については今後も検討していく。

【お知らせ】

＊大斎プログラム
2月26日から4月1日までの毎主日、午後3時より30分間、「祈りの時」を持ちます。
また、毎週木曜日の午前7時半より聖餐式が捧げられます。

＊山手グループ大斎静想会
3月10日（土）10～15時
ナザレ修女会修道院にて
講話　高橋顕司祭

＊礼拝スケジュール
2月22日（水）　10時半
大斎始日（灰の水曜日）
4月1日（日）8時半・10時半
大斎前主日（棕櫚の日曜日）
4月5日（木）　19時
聖木曜日（洗足式）
4月6日（金）　12時
聖金曜日（教区礼拝・主教座聖堂）
4月7日（土）　18時
聖土曜日
（イースターヴィジル）
4月8日（日）8時半・10時半
復活日礼拝・祝会
5月27日（日）8時半・10時半
聖霊降臨日（ペンテコステ）

牧師より
当教会の納骨室にかつてご遺骨を預けられたご関係者の方は、高橋顕牧師までご連絡ください。

【編集後記】

■三寒四温の中にも、確かな春が感じられるこの時期、新編集部による新装版第二号をお届けします。楽しい「聖鐘」を目指したのですが、いかがでしょうか。お楽しみいただけたら、感謝です。皆さんの参加をお待ちしています。（東）

■先日ある方からうかがった話。「草木花たちを2分間じっとみつめてごらん。きっと何かを語りかけてくるから」と。
春の訪れは主のご復活のとき。礼拝での祈り、賛美とともに、自然界に溢れる新たな命の息吹に、心して触れたいですね。（加藤）

ご降誕の喜びと恵み

２０１１年11月26日の午後6時、山手グループの各教会から約30名が集った「降臨節前夕 光の礼拝」。アドベントクランツ（ろうそく）の一本に火が灯され、主のご降誕を待ち望む備えの季節が始まりました。教会の暦も、ここから新年が始まります。

この時期恒例のクリスマス・ファミリーコンサートは12月11日。近隣や他教会からのお客様も定着してきました。今年のテーマは「聖歌でたどるクリスマス物語」。旧約の預言から主イエスの誕生までの出来事がほぼ聖歌の詩によって語られ、タレント豊かな信徒の様々な楽器も加わりました。また、ゲストでお迎えした神田キリスト教会の信徒、高柳章江さんの、スッとした美しい佇まいと柔らかなソプラノの歌声に、主の母マリアの姿を重ねた方も多いことでしょう。

24日、イブ礼拝前のキャロリングの列は、信徒や近隣の方々が徐々に加わり、教会到着時には約70名を数えるほどに。「一夜限りの聖歌隊」の歌声が、閑静な住宅地の闇の中に静かに響きました。実は後日、社会不況の中で職を失い、失意のどん底にある方が「どこからともなく聞こえてきた清らかな賛美歌の歌声に救われ、希望を見出すことができた」との感謝のお電話を寄せられたとのこと。教会のメッセージが社会にも響いたことに希望を覚え、また、「わたしたちができること」の意味を改めて考えさせられる出来事です。

4本灯ったアドベントクランツを前に、朗読と歌、そして迫真の演技が微笑ましいぶどうの木ページェントによるイブ礼拝で、主を迎える心は整えられ、翌日のクリスマス礼拝では２００名の喜び溢れる賛美の声が聖堂を包みました。

またこの日、2名の方の洗礼式も行われ、イエス様との新たな歩みを踏み出されました。

深い闇から希望へ
クリスマス・コンサートに寄せて

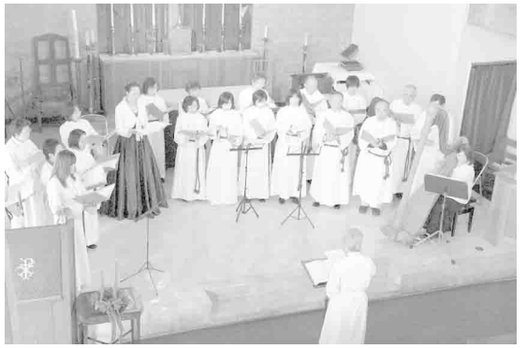
石川瑛子

賛美と祈りの中にある例年のクリスマス・ファミリーコンサート、今回、東日本大震災の事を思いながら歌った聖歌１０２番は「深い闇の中から希望を見出してどんな時でも神様と共にいる」そんな気持ちにさせてくれました。

聖歌隊の方々、前日猛練習なさったとか、今迄にも増して美しいハーモニーを聞かせてくださいました。

ソプラノの高柳章江さんのあたたかみのある声のすばらしさと、ハープの渡辺かやさんとのコラボレーションは、広く知られているグリーンスリーブスの旋律が、心にしみる一曲でした。

皆さんと共に歌った聖歌は、クリスマスを迎えるコンサートにふさわしい耳になじんだメロディが多く、近隣からご参加下さった方々と一緒に、楽しいひと時を味わうことができました。



また、今年初めて参加してくださいました鈴木和泉さん（お子さんたちがぶどうの木の生徒）のナレーションが、とても素晴らしくコンサートを盛り上げて会場を一つにし、音楽の力の大きさに、あらためて深い感動を受けました。

このコンサートの企画と準備に携わった関係者の方々に、心より感謝いたします。

キャロリングとイヴの礼拝、そしてクリスマス礼拝

東　理夫

十二月二十四日の夕方六時頃、池ノ上駅の階段を降りてきた人たちはちょっと驚くのではなかろうか。それとも毎年の行事に、ああ、今年もそういう時期なのだ、とか、そうか、今日はイヴなんだ、と思われるだろうか。

キャロリングに加わるのは楽しい。寒い中、懐中電灯の細い明かりの中に浮かぶクリスマス・キャロルを歌う喜び。足早の通行人を横目に、沿道に出て見送ってくださる方がたに笑顔を返し、行き交う車を避けながら、ようやく教会にたどり着いたときの安堵感と充実感は、一度味わったらやめられない、と毎年感じる。

イヴの礼拝は、いつも荘厳で身が引き締まる。創世記の物語を朗読と科白で再現する良さ。そして「み使いの主なるおおきみ」と聖歌八十二番を歌う時の心を充たす誇り。とくに「来たりて拝め」の盛り上がりでの、背筋を走る感動。この歌を聖歌隊とともに歌うために、この夜教会に来るのだ、とあらためて確信する。

翌日のクリスマス礼拝の、喜びに満ちたこの聖餐式の輝きはどうだろう。この清清しい感激は、格別だ。この感動を多くの人に味わってもらいたい、と豊かな気持ちで「クリスマスおめでとう」とぼくはいろんな人に声をかける。

子どもだけで頑張りました
ぶどうの木ページェント

川嵜葉子

12月24日が土曜日に当たっていたために、今回のクリスマスページェントはイブ礼拝の中で演じることになりました。例年は、子どもの人数が足りないために必ず大人の方々に出演を依頼しなければ成り立たないページェントでしたが（それはそれで楽しいものでしたが…）、昨夏のキャンプ前後からぶどうの木メンバーがふえてきたおかげで、高橋司祭の〝子どもだけでページェントをしたい〟というたっての希望もあり、また司祭の子どもたちへの呼びかけもあって、今回はここ数年例を見ない21名という多数の子どもたちの参加によるページェントが実現しました。

台本は高橋司祭の書下ろしによるもので、礼拝の中で演じるということもあり例年より2歳から6年生までの子どもたちが一生懸命セリフを覚え、練習してきました。

当日は大変な緊張の中でしたが、皆様の暖かい見守りの中で無事に良い聖劇を演じることができました。ありがとうございました。

洗礼にあずかって

セバスチャン大部胡知（だいぶこはる）さん

この度は皆様のお陰をもちまして無事に洗礼式を終えられたこと、心より感謝致します。

洗礼を受けての感想、ということで書かせていただいているのですが、自分の心をよくよく見つめてみると、クリスマスから何ら変わりがないことに驚きました。さて、なぜ変わらないのかということでまた気持ちを振り返りますと、どうやら洗礼式に至るまでに、幾重にも心の準備をしていたようなのです。それは決意であり覚悟であり納得であり、或いは責任だったかもしれません。とにかくそれらの出来事は、すべてクリスマスまでに終わっていたのです。

私は音楽と舞台演劇を専門に学んでいます。ヨーロッパの歴史の中で、音楽は賛美から生まれ、楽器は奏楽から生まれ、作曲家はコラールを書くために存在しました。そして、オペラをはじめとする現代演劇は教会のページェントの上に成り立っています。虎穴に入らずんば…というのでしょうか、音楽とその周辺の文化を生業にする人間として、キリスト教を避けては通れない（もちろん避けようと思ったことはただの一度もありませんが）だろうという結論が、受洗の大きな動機になったのは事実です。

今後の人生設計における信仰の位置とは、日々の営みの裏付けとする一方で、キリスト教を題材とした数多くの演劇作品との関わりにおける優位性、また長年の夢であるアメリカ留学での宗教の壁を乗り越えることです。

今後ますます、神さまとの結び付きを強めるべく精進して参ります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

ダビデ服部貢士（はっとりこうし）さん

教会との出会いは、三年前の秋、二十年来の友人である川島一郎氏に誘われお手伝いをさせて頂いたバザーでした。当時の私は仕事に追われ、休みの日ですら職場に出かける日々でしたが、「教会でのバザーを楽しめたら気分転換にもなるかもしれない」と思っての参加でした。バザーを終えて、教会の皆さんとの会話や出会いを楽しめた充実感とともに、多くの人から感謝の言葉をかけて頂き、とても良い気持ちになりました。何気なく足を運んだ教会での一日は、想像していたイメージとは違い、非常に親近感を感じるものでした。一年後のバザーでまたお手伝いをさせて頂いた時には、前回のバザーのことを覚えていてくれた皆さんとの再会で、最初の時とはまた一味違った充実感がありました。

当時、私は公私共に転機の時期でもありましたので、教会での時間が新鮮で、バザーだけではなく、何か自分のできることはないだろうか？という思いと同時に、教会との関わりをもう少し深めてみようと、日曜日の礼拝に足を運ぶようになりました。一つ一つの言葉や行動に対する疑問を川島氏に教えていただきながら、とにかく礼拝に足を運ぶことで慣れていってみようということから始めました。

信仰というものがどういったものなのかも自分の中で見つけ出すこともできないまま半年が経ったある日、川島氏の叔父である秋山静一氏に「あなたもそろそろ洗礼を受けてみてはいかがですか。」と勧められ

からし種

教会には、ことに礼拝に関することをはじめ、当たり前のように行われていることが数多くありますが、ふと、立ち止まって考えると、「なぜ？」と思うことがありませんか。時には神学的なとても重大なことである一方で、あまり意味がないのに習慣になって、いかにも大切なこととして行われていることもあります。

以前に来日されたことがあるダービー教区のマイケル・ペラム主教が、昔派遣された教会のアコライトが祭壇に登ったときに、ある箇所に来ると、皆足を高くあげる変なしぐさをするので、なぜかと聞くと、そこは以前高くなっていたそうで、それが取り除かれた後も同じしぐさをしていたという笑い話をされました。

これは極端な例ではありますが、長い歴史の中、先人たちの篤い信仰によって守られてきたことひとつひとつを大切にするのは、表面に現れていることの背後にある心であることを覚えていたいものです。

前置きが長くなりました。礼拝、教会生活、制度のことなど、素朴な「なぜ？」を取り上げ、考えるコラムを新設します。信徒の皆様のご参加をお待ちしています。

■なぜグッドフライデー？

キリストのご復活の喜びは十字架とその後の闇なしには存在しません。主の受難の聖金曜日は英語では"Good Friday"。「キリストのご受難を通して救いの恵みが全人類に及んだ」という意味でこう呼ばれるようになったのです。

最後の晩餐（聖餐制定・洗足）、十字架、そして真っ暗なよみから新たな光へ。この聖なる三日間のことがらと主が示された私たちへの深い愛を思い、祈り、生活することによって、毎年同じことのくりかえしではなく、新たな生命をいただく真の復活の喜びにあずかりたいと思います。（K・K）

Good Friday

た言葉が大きく心に響き、おぼろげな理解のうちにも「洗礼を受ける」ことを真摯に考え始めました。

そんな時に出会った言葉が、マザーテレサの「愛の光線」です。（〝心の余白〟に掲載）。何度も読み返し、心安らぐ想いを感じたものです。少しずつですが、「洗礼を受ける」ということへと目が向き始め、礼拝だけではなく、聖書に触れ、お祈りの言葉を口にする時間が次第に増えていきました。

昨年の九月、高橋司祭から「今年のクリスマスに洗礼を受けてみますか？」と言われました時には、確かなものを感じていました。多くの皆さんとの関わりの中で優しく接していただいた時間や言葉、そして笑顔があったからこそ教会生活を続けていこうと思えたのでしょう。イエス様に導かれるかのごとく洗礼を受けて、新たに洗礼名をいただき、生まれ変わって行く自分があることを期待し、今後も信仰を深めていきたいと思います。

心の余白
愛の光線

主よ、お助けください。
私がどこにいても
あなたの香りをただよわせますように。
あなたの〝霊〟といのちで
私の心を満たしてください。
私のいのちがことごとく
あなたのいのちの輝きとなりますように。
主よ、あなたご自身が
私の存在を完全に支配してください。
私の接する人々が皆
私の中にあなたの現存を
感じとれますように。
私を見る人が私ではなく
あなたをこそ私の中に
認めますように。
主よ、私の中にとどまってください。
そうすれば私も
常にあなたの栄光をこの身に反映させ
兄弟姉妹の光となることができるでしょう

マザー・テレサ

聖堂塔に新たな十字架

聖堂塔屋改修工事報告

昨年のクリスマスの日、修復工事のためかけられていた覆いが除かれ、きれいになった塔が姿を現しました。塔正面に新たに付けられた十字架は、聖三一教会聖堂の新しい顔になりました。

昨年11月の臨時信徒総会で承認された工事は、当初外壁の補修工事が目的の予定でしたが、足場を組んで確認作業をした結果、3・11の大地震によると考えられる十字架自体の損傷を確認し、大至急十字架の工事が追加されました。大きなひびが入っている写真を見ますと、よく落ちてこなかったものと思います。

十字架は7メートルの大きなものでしたので、同等のものを再建することは工法的にも予算的にも無理と判断され、約半分の大きさのものを再建することになりました。

本来の補修工事、シーリング（雨水のしみこみ防止）、塗装、クラック（ヒビ）の他、2階両脇部屋と塔屋最上部の屋根防水工事の経費は500万円を予定していましたが、損傷した十字架の撤去、新設に、壊れていた避雷針の交換が加わり、660万円となりました。

働きグループ紹介1

祈りの場、心を込めて清掃

礼拝の場であり、集いの場でもある教会を維持していく「働きグループ」の皆さんをご紹介しようという新設コラムです。二〇一一年四月の段階で、三十八のグループがそれぞれの場で奉仕くださっています。そこで第一回はもっとも大切な聖堂の清掃を担当してくださっている「聖堂清掃係」の皆さんをご紹介します。

× ×

現在十四人の方がたが五つのグループに分かれて、それぞれ二名から三名で各週を担当しています。ここでの問題は、やはり人手不足。どうにかもう少し多くの方に手伝ってもらいたい、と中野誠さんはおっしゃる。礼拝が終わってすぐに掃除機を扱う係りと椅子や聖具の乾拭きの係り、また座席の座布団や聖歌集、式文、日課、祈祷書などを整える係りなど、大忙しです。だがやり方によってはほんの短時間、昼食には充分間に合うので是非お手伝いをお願いしたいとのこと。

掃除機担当で大変なのは、階段のところ。通る人も多く、その人たちの足を止めないようにと結構苦労する、と滝博邦さん。どうぞ階段の上り下りにはご協力を。「ご苦労様」の一声をかけてあげてくださいね。

まだまだご苦労話は続くのですが、取材者の経験から申し上げれば、たとえば礼拝用書の整頓は礼拝後席をお立ちになる時にちょっと揃えてくださると、どれほど助かるかわかりません。あの椅子の下側の高さで本を揃えるのは、腰に大変に負担がかかるのですね。清掃係の方がたへの負担を少しでも減らして差し上げたい、とつくづく感じた今回の取材でした。（編集部）

前列右から滝博邦、中野誠、飯島登治、後列右から滝真理子、村上道夫、湯田正範、田島信次、千村雅信、西澤功宰、大部正敏、井上昭義、名倉敞、江川純、欠席・矢野峻行（敬称略）

まじわり

吉村共介さん 啓子さん

ミッションスクールでの小学生時代に聖書に興味を持った吉村共介さんですが、大学で竹内謙太郎司祭と出会い、三年生の時に三光教会で洗礼、堅信を受けました。当時は大学生だった五十嵐主教や英国在住の森山司祭達と深夜まで議論をしたり、M・ブーバーやH・コックスなどを読み（今も愛読書）、BSAの活動に活発に参加。三十五年前に聖三一教会へ転籍しました。

一方、啓子さんは幼児期から外交官である父上の赴任地のパキスタン、フランス、アメリカで暮らし、教会建築、絵画、聖書物語を身近にして育つ中、生活文化としてのキリスト教にはなじみがありました。共介さんと婚約して初めて聖三一教会の礼拝に出席し、竹内司祭の歌ミサと説教に非常に惹かれ、1976年に洗礼、堅信を受けました。

共介さんは外資系IT企業のビジネスマンとして、日本国内、北南米、アジア各国の製造業の情報システムの構築を長く担当、教育におけるITの活用にも携わってきました。一昨年末の定年退職後はアジアの経験交流のNPOをスタート。3・11以後は東京都の「災害時の事業復旧計画策定支援」に参加し、中小企業の経営者の事業復旧のコンサルティングをしています。

フリーランスの翻訳者としての仕事を持つ啓子さんは、国際的な女性のNPO、CWAJ（女性・視覚障害者の高等教育支援と英語教育・国際交流を理念に掲げている）で活発なボランティア活動をしています。

子供たちは成人して社会人となり、長男祐介さん、次男公介さんはそれぞれ転勤で地方在住。一人暮らしになった末っ子の美沙子さんに、啓子さんは毎朝携帯メールで目覚まし確認をするとか。幼児洗礼を受けた三人の堅信は本人たちの意思に任せています。

休日には旅行をしたり、共介さんは里山の散策、スポーツや読書、啓子さんはご両親の介護の時間が最近は増えてきましたが、趣味のバレエを健康維持にもと続けています。

教会バザーでは日曜大工を気軽に引き受ける共介さん、売り場担当の啓子さんと別の横顔を見せるお二人、礼拝・教会生活でご一緒できることが増えることでしょう。（T・N）

カラシの木が枯れました

聖堂に上る階段の右に、大きなカラシの木があったのを、皆さんご存知ですか。

以前五十嵐司祭（当時）と一緒に、エルサレムの聖地旅行に行かれた川島昭一郎さんが、当地のカラシ種を持ち帰り、自宅で土を変えたり、肥料を変えたりして、やっと芽が出た苗を持参されたものです。その後、木はずんずん大きくなり、毎年、暖かくなると、小さな細長い黄色の花を枝いっぱいにつけてきました。ところが一昨年枯れてしまいました。夏の猛暑に耐えられなかったのでしょう。

ルカによる福音書十三章に、「神の国は一粒のからし種のようなものである。ある人がそれを取って庭にまくと、育って木となり、空の鳥もその枝に宿るようになる」。とあります。

階段の下に、小さな苗があります。どうか皆で、そっと育ててみましょう。

（庭プロジェクト 中野誠）

被災地から いわきに暮らして

森田有希

今年5月より福島県いわき市の工場へ転勤となり、勤務しています。

去る3月11日の東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故に因り、多少の混乱はあったものの現在は家族と共に生活が出来ています。

いわき市は福島県内の他地域に比べ、放射線量も少なく、外出すると乳児や妊婦が普段通りの生活をしており、放射線と生活との葛藤に悩む幼子の父として励まされます。

福島県の被災地への聖公会の活動としては市内南沿岸部にある小名浜聖テモテ教会を基点とした『小名浜聖テモテ・ボランティアセンター』が設立され、北関東、大阪、京都、神戸各教区の信徒の方が月交代で常駐し、県内のボランティア活動に勤しんでおられます。特に注力しているのは、いわき市内の泉玉露仮設住宅（富岡町からの避難）の集会所にて毎週水・土曜日に『ほっこりカフェ』と題し、茶菓子と語りの場を提供しています。私たち家族も都合がつく限り、参加しています。いらっしゃる住民の方は年配の方が大半で、一時の和みを満喫されています。

ほっこりカフェで地元の方に抱かれてご機嫌の長男 愛瑠斗（あると）くん

仮設住宅は市町村毎に設立されていますが、必ずしも同地区や近所の住民の方と一緒に入居出来るという訳ではありません。先日ようやく仮設住宅自治会が設立されましたが、「絆」の構築はこれからという現状です。

3・11以降、浮き彫りになった日本人、もとより世界が抱える苦悩は被災地では、さらに感じるものがあります。それは放射線、風評被害、将来への不安、孤独、無自覚の悪意、権力者の愚かさ等、多種多様です。

それでも人を思いやる心を信じ、被災者や避難者、世に生きる全ての人、そして教会の皆様の平安をお祈り致します。

講演会 「リサイクルから見た 現在過去未来」

10月6日、壮年会・BSA共催で講演会が開かれました。講師は真光教会信徒の細田衛士氏。現役の慶応義塾大学経済学部教授で、専門は環境経済学。3・11後はマスコミ関係にもひっぱりだこの先生です。

細田衛士氏

お話は、ここ20年間、捨てられていた廃棄物が実は大変なお金になっていることから始まりました。中国のレアアース高騰の余波を受けて、国内で破棄される携帯電話やパソコンなどから貴重なレアメタルが取り出され、それらが宝の山となっている、という興味深いお話もありました。

また、家庭で出される資源ごみ、主にペットボトルや古紙が、隣国中国の経済成長と相まって大量に輸出されたため、本来各自治体の重要な資金源となるべき物が、回収の前に何者かに置き場から持ち去られてしまうという異常事態が起きていました。これも、このところの中国の景気衰えとともに、引き合いが少なくなっているとのことで、ゴミ一つの事で世界の景気が分かるという面白いお話もありました。

日本社会の大きな問題としては、自治体が処理する汚泥が今まではセメントの副産物として再利用されていましたが、東日本大震災以降は、放射線が含まれていると報道され、これらの焼却灰の処理に頭を悩ませていて、未だ解決の方向性が見つかっていない状況だとのこと。政府の諮問委員も務められている先生に、具体案をうかがえなかったことは残念でしたが、この問題の深刻さが推察されました。

環境経済という最先端の研究をなさりながらも、地球環境の保全、資源のリサイクルを、キリスト者の信仰をもって取り組まれていることが、お話から垣間見られました。同じ聖公会信徒として、難しい課題を分かりやすく、親しみをもってお話いただきました。先生からも「今日は楽しい時間をつくっていただいてありがとうございました」と、逆にお礼を言われました。

〈ほそだえいじ・1953年生まれ。慶応大学教授・経済学博士。著書に『環境と経済の分明史』『資源循環型社会』『捨てられたらどうなる驚きの電車飛行機ビル解体』など多数〉

（津村周傳記）

牧師のエッセイ1
土曜日の変なお爺さん

司祭 高橋顕

私は小学校3年生まで秋田で生まれ育った。父は聖公会の牧師で、私達家族は秋田聖救主教会の牧師館に住んでいた。その教会には併設の幼稚園があり、夕方になると、その幼稚園の園庭に、近所の子ども達が多く遊びに来ていた。特に土曜日の夕方は、園庭に遊びに来る子ども達がとても多かった。

そんな土曜日の夕方に、黒いマントを羽織って、茶色いカバンを持ったある老人が、教会の門を入って幼稚園の園庭にやって来た。そして園庭で遊んでいる一人の子どもの前に突然ひざまづき、その子どもの両手をとって、老人は自分の頭の上にその子の両手をのせ、「主よ、幼子の祝福を我に与えたまえ。」と大声で何度も唱えた。驚いたのはつかまったその子だけではない。園庭で遊んでいる子ども達みんなが驚いた。しかもその老人はそのように唱えて祈りながら、段々と感きわまったように涙を流して泣き始め、涙声で、「主よ、幼子の祝福を感謝したてまつる。」と唱えて、その祈りを終えるのである。そしてその老人は立ち上がり、園庭を通り過ぎて私の住んでいる牧師館に入っていくのである。そのようなことが月に二回の土曜日にくり返された。そしていつしか近所の子ども達は、その老人を、「土曜日の変なお爺さん」と呼んだ。子ども達は楽しく園庭で遊んでいる時に、そのお爺さんにつかまって頭に手を置かされ、目の前で泣かれたのでは、たまったものではない。月に二回の土曜日の夕方に、そのお爺さんが園庭に現れたら、みんな一斉に「わあーっ」と蜘蛛の子を散らすように自分達の家に逃げ去った。しかし、私はどこにも逃げ去ることができない。そのお爺さんは私の家である牧師館に来るのだから。だからいつしか、そのお爺さんが園庭に現れたら、そのお爺さんの頭に両手を置いて、そのお爺さんを祝福する係は、私になってしまった。そのお爺さんは、植松金蔵司祭であった。

金蔵司祭のご子息は後に中部教区の主教になられ、金蔵司祭のお孫さんは後に北海道教区の主教となられた。その植松金蔵司祭、近所の子ども達にとっての「土曜日の変なお爺さん」は、その当時、月に1回秋田聖救主教会の主日礼拝をお手伝いするために、その前日の土曜日から教会の牧師館に滞在していたのである。植松金蔵司祭の、日曜学校での子ども達に語るお話を聴いたことがある。しかし、何を語っているのか子どもの私にはさっぱりわからない。だが、とにかく熱く、熱心に語っている気持ちは伝わってきた。そのうちに段々と、子ども達にではなく、上を向いて神様に語っているようになるのである。

今になってあらためて植松金蔵司祭のあのお姿を思い起こすと、熱烈な信仰者に出会えたことの感謝が私の心に沸き上がってくるのである。信仰者は神様に向かって「変」であってもいい。

2012年度受聖餐者総会

新年度宣教方針、収支予算案等承認

2012年度の受聖餐者総会（議長・高橋顕司祭）は、2月12日（日）の主日礼拝後、信徒77人（委任84人）が参加して開かれた。提案された11年度教務報告、12年度宣教・司牧方針、各働きグループの活動方針、11年度収支決算案、総額2400万円に上る12年度予算案などの各議案を承認、可決。新年度の教会、運営、活動がスタートした。

高橋司祭は総会冒頭、主題「さらに生き生きとした教会へ」とする要旨次のような新年度の宣教・司牧方針を提案した。

昨年は年間計画のもとに、諸礼拝、2回の受聖餐者総会、コンサート、バザーなどがと滞りなく行われ、その一つ一つが大切なお恵みに満ちた出来事だった。ことに代沢子ども文庫、映画会、コンサート、バザーなどを通して、東京聖三教会が近隣、地域の方々に広く認知され、この教会に大いに親しまれていることは喜ばしい限りである。

また一つ一つの行事、活動の働きや作業が、信徒の持てる賜物を捧げ合ってなされていることは、教会の本来あるべき姿をしっかり証ししていることにほかならない。出来ることを出来る力で喜び分かち合いながら、今年もさらに生き生きとした信仰共同体として歩んで行くことを願っている。

東京教区の現状は、聖職の人数が十分とは言えない。一人の牧師が他の（複数の）教会の管理を担ったり、応援する状況が続いており、今後この状況がさらに顕著になることが予想される。私たちは東京聖三教会のさらなる充実を求めながらも教区全体の現状を視野に入れ、他教会の信徒、聖職と共に補い合い支え合いながら公会の働き、宣教の働きを担い、深めていきたい。

現在、教会では様々な活動や学びが行われている。礼拝への出席とともにこれら活動に参加し、信仰生活の出会いや喜びをますます豊かなものとするよう努力しよう。今後、さらに積極的な気付きやアィディアによる新たな活動や学びのプログラムが始まることも大いに期待したい。また受聖餐者は私たち教会の活動・維持・運営のための責任ある担い手であることを改めて確認したい。

宣教、伝道の視点をもって信仰生活に励み、月約献金、感謝献金の意味と大切さをさらに自覚しつつお捧し、主日礼拝その他の礼拝でのみ言葉と聖餐と祈りによって、私たちが励まされ養われていることを証ししよう。

◆2011年度決算（第1号議案）

収入総額3551万円、支出総額3137万円の黒字を計引き412万円の黒字を計上したものの、収入面で別途積立金690万円を取り崩し充当したため実質的には277万円の赤字決算となった。

ちなみに同年度教区分担金は1449万円、管区教区経由献金83万円（東日本大震災献金65万円を含む）。

予算に対し特に目立った支出項目は、修繕・清掃費93万円（ブレーカー交換、トリニティハウス屋根修理、正門看板整備等）、建築・大修繕費675万円（聖堂外壁修理、聖堂塔十字架修理等）など。

◆2012年度収支予算（第2号議案）

収入見込み額2399万円に対し、支出総額は2407万円で8万円の赤字予算となった。

教会財政は年々献金額などの収入減少傾向を反映して緊縮予算編成となった。収入見込みは前年実責の67・6％に抑え、支出面も同76・7％とした。このような厳しい現実から、同年度も積立金の取り崩しは避けられない見込み。教区分担金は前年同額の1450万円。

主な支出予算は次の通り。

（単位　千円）

※宣教関連費
- ・祭壇費　300
- ・代沢こども文庫　30
- ・ぶどうの木・中h・igh170
- ・コンサート関連　116
- ・三一映画会　25
- ・印刷図書費　125
- ・通信費（誕生日・逝去者記念・お見舞等）　400
- ・事務機器関連　880
- ・事務・消耗品　200

※維持関連費
- ・水道光熱費　1200
- ・庭プロジェクト　350
- ・施設保全　200

※対外諸活動
- ・韓国プロジェクト　30

※教区費分担金　14500

会計報告資料の形式が従来の方法と異なっていたこと、赤字の取り崩しの記載方法などの会計処理方法について質問が集中したが、内容については受聖餐者多数によって承認された。また、総会資料に決算・予算の内訳表が添付されていなかったが、これは教会活動をつぶさに表す数字であることから、後日改めて提示されることが確認された。

◆2012年会計監査担当者承認の件（第3号議案）

昨年まで会計監査を担われていた矢野峻行さんが、今年度会計委員となったことから、新たな監査人が必要となった。折しも教区財政委員会から、各教会の財政状況の透明性を保つことを目的に外部監査の提案があり、当教会としても2名の財政委員の派遣を受けることで承認。

◆2011年度バザー収益金133万円の配分先

（単位　万円）

※東日本大震災孤児育英基金　33
※震災被災地障害児支援　33
※アジア学院　13
※アルディナウペポ　13
※教会の働きのため　41

◆2012年度教会委員

※総務　川島一郎　小林幸子　千村雅信　八幡道子
※会計　後藤務　名倉裕子　矢野峻行　八幡眞也
※礼拝　加藤啓子　砂田郁郎
※行事　五十嵐美奈　東理夫　尾沢うめ子
※教育　後藤敬一　津村周傳　東邦子

◆教区代議員

加藤望　後藤務　小林幸子

◆過去5年間の受聖餐者推移

2011年	218人
10	208
09	214
08	224
07	223

◆過去5年間の主日礼拝平均出席者および陪餐者数

（出席者平均95人陪餐者平均84人）

	（出席）	（陪餐）
2011年	95人	84人
10	89	78
09	90	82
08	91	82
07	90	81

◆ぶどうの木（日曜学校）礼拝出席者

2011年	410（平均9）
2010	283（　6）
2009	210（　5）

◆洗礼者　4名
◆堅信者　2名
◆転入者　7名
◆転出者　3名
◆逝去者　7名

（文責　松田義夫）